低学年「表現リズム遊び」における教師及び教材の働きかけ

－低学年運動好き表現運動嫌いに着目して－

鈴木　文菜　（千葉大学）

I.　目的

本研究では、低学年「表現リズム遊び」の際に出現する「模倣」について、運動好き表現運動嫌いの児童の模倣の出現を明らかにしながら、教師の働きかけと効果的な指導言語について検証することを目的とした。

II.　研究方法

1）対象者：小学校第 2 学年 4 組の児童 34 名、抽出児童はユウタ・ケンタ・エマ（仮名、運動技能が高いものの表現運動が苦手）、授業者は教員歴 12 年のヤノ教諭（仮名）であった。児童の抽出は、指導者によるものだった。

2）調査方法：十二支の動物を題材とした全４単位時間の検証授業

3）分析方法：単元前後に表現遊び・リズム遊びに関わる意識調査、毎授業後に児童による自己評価を行った。ヤノ教諭の指導言語を、分析カテゴリーで分類した。技能の実態と変化は、十二支の中でも動きの広がりが少ない「へび」を対象として、授業中の表現遊びの中で自然発生的に表出した児童の動きを対象に分析した。その際は、「模倣の動きの分類基準法」（笠井ら，2018）を参考にした。

III. 結果と考察

1）指導言語分析

ヤノ教諭の指導言語の中で最も多かったカテゴリーは、具体的な動きや場面のイメージを提示するフィードバック（以下 FB）矯正具体であった。1 時間目 52.4%、3 時間目 55.6%、4 時間目 58.0%出現した。ヤノ教諭は児童の動きに具体性を持たせていたことが推察された。また、児童を具体的に褒める FB 肯定具体の割合が増加したことから、児童の動きを把握し児童全体へと徐々に共有を図りながら授業を行っていたことが明らかになった。

2）技能分析（紙面の関係上ユウタのみを掲載）

ユウタの場合、1 時間目は「模倣なし」の割合が半数以上を占めていたが、3 時間目には簡単なへびの動きの「形骸模倣」、4 時間目にはさらに具体的な動きの「誇張模倣」が出現した（表 1）。

表１　ユウタの技能分析

	１時間目	３時間目	４時間目
形骸模倣	38.9%	64.0%	58.1%
誇張模倣	5.6%	36.0%	39.5%
オリジナル模倣	0.0%	0.0%	2.3%
模倣なし	55.6%	0.0%	0.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

3）指導言語と技能分析

児童のオリジナル模倣が出現する直前のヤノ教諭の言葉掛けは、FB 矯正（具体）であった。児童に具体的なイメージを持たせるためには、具体的な言葉掛けが重要であり、児童の独創的な創造性の向上に影響を与えることが示唆された。

4）VAS 調査

表現における項目で単元を通して高い水準を維持した。「表現が得意か」に関する項目では単元前後で有意な向上がみとめられた。

IV.　結論

本研究で、低学年に対する効果的な指導言語が示唆され、授業者が題材の特性や動きを理解し、具体的な言葉かけを行うことが重要であると推察された。

主な参考文献

笠井利恵・栗原知子・滝沢洋平・笠井里津子・近藤智靖（2018）小学校１年生の表現リズム遊びにおける模倣の動きに関する研究－分類基準表の作成と動きの変容に着目して－，日本体育大学大学院教育学研究科紀要，第２巻第１号：pp. 157-174